

福島県県外避難者帰還・生活再建支援補助金

事業評価調書

団体名 特定非営利活動法人フュージョン社会力創造パートナーズ

事業名	茨城の魅力をを知る避難者主体の交流会事業、及び戸別訪問事業
事業の内容 事業の目的	<p>【事業内容】 以下の2つの事業を柱とする。</p> <p>1. 茨城の魅力を知る避難者主体の交流会事業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・避難先である「いばらき」の魅力をを知るための交流会を6回、一部避難者主体で実施する。具体的には家族向けに「いばらきの美味しいを食べる」交流会として、夏のソーセージ作り（筑西市）、コーヒーバリスタ体験（つくば市）、秋のぶどう狩り交流会（行方市）、春のイチゴ狩り交流会（つくば市と鉾田市で各1回）を5回行う。また、稲敷地区のまち歩き交流会第4弾を稲敷市で1回行う。 ・上記6回の交流会とは別に、自主避難者に絞った交流会を1回開催する。 ・今年度も、避難者が主体となった交流会として、地元民政委員や支援者と連携しながら実施する。 ・交流会参加費用は、一部を参加者負担とする。 <p>2. 戸別訪問事業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・令和2年6月1日から令和3年3月31日まで適宜実施する。 ・茨城県つくば市、つくばみらい市、旧稲敷郡（美浦村、稲敷市、阿見町、牛久市）、鹿行地域（鹿嶋市、波崎市）等の茨城県南、鹿行地域への避難者（一部は自主避難者）を対象とし、延200世帯の訪問活動を行う。 ・その際には、福島県・福島県内各町の復興支援員・各自治体・教育委員会・社会福祉協議会・民政委員・茨城県内への避難者・支援者ネットワーク「ふうあいねっと」・避難者自助グループなど、多様な方々と連携しながら、効果的な戸別訪問を行う。 <p>上記の事業を効果的に実施するために、ふうあいねっと、福島県復興支援員、福島県内支援団体、また、他県の避難者支援ネットワークの会合にも参加し、情報交換を行っている。</p> <p>【事業目的・必要性】 茨城県内への避難者数が3,200人（令和2年2月28日福島県発表）と、東京都に次いで2番目に多く、未だに高止まりをしていることを考えると、茨城県内での支援の在り方が他県での避難者支援にも良い影響をもたらすことができるようにしていきたいと考えている。</p> <p>1. 茨城の魅力を知る避難者主体の交流会事業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・避難先での移住を決められた方がほとんどであるため、地域の良さを「食」「人」「歴史・文化」などを通して、感じてもらう。これにより、茨城に住み続けるにしても、誇りと愛着を持って、生活がしていける基盤づくりを行う。 ・平成29年度から実施している「いばらきの美味しいを食べる」交流会は、毎回盛況であり、継続開催を希望する声も多く寄せられているため、今年度も毎回テーマや開催場所を変えて取り組むことで、より広く避難者ニーズに答え得るものとなる。特に、これまで茨城県南地域での交流会が主であったため、鹿行地域、県西地域での会を増やしていくことで、各地への避難者に機会を提供していく。 ・昨年度2年ぶりに開催した自主避難者に限定した交流会では、1人しか参加者がいなかったが、継続を望む声があり、また自主避難者の声を拾い上げる機会が極めて減ってきているため、質に配慮して今年度も実施する。 ・本NPOは、当事者たる発起人を、あくまでも黒子としてサポートすることで、当事者の主体性を引出し、自ら課題解決に向けて、連携や意見交換できる基盤作りをするものとする。そのために会の運営に当事者に関わって頂くスタイルで継続して取り組んでいく。 ・震災後9年を経過しても、ようやく交流会に参加して見ようという気になった、という方もいらっしゃるため、まだまだ交流会の必要性はあるものとする。 ・筑波大学学生支援団体 Tsukuba for 3.11、筑波学院大学卒業生ネットワークとも連携することで、次世代の地域社会の担い手を育む機会とする。 <p>2. 戸別訪問事業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・10年節目もあり、本NPOの総力を結集して延200世帯に及ぶ大規模な訪問活動を実施する。

・震災後9年が経過し、避難者のニーズも個別の実情に応じて多様に変化している。相談件数は減ってきているものの、1件1件の課題は深刻なケースが目立ってきており、また、高齢者を中心に亡くなる方、体調を崩される方も多いため、継続して木目細かな寄り添ったパーソナルケアに取り組んでいく。その中で、より個別の実情に応じた専門機関や地域に繋いでいくことで、ニーズが表面化しにくい、声が挙げにくい、体調が万全でない、地域付き合いが上手くできない、などの環境に置かれている避難者の生活をサポートし、セーフティネットに繋げていく。

・つくば市以外の県南地域の自治体では、本NPOが7年前から旧稲敷郡（美浦村、稲敷市、牛久市、阿見町）で、一部民生委員と連携しながら交流会や戸別訪問活動に力を入れ始めたものの、つくば市ほどの支援は受けられていない。そこで、我々支援者側が手を引いた後も、継続的に、地域での見守り体制づくりが行われるきっかけとなるよう、避難者と地域、また避難者同士のセーフティネット作りをしていくことを目的とする。

・筑波大学学生支援団体 Tsukuba for 3.11、筑波学院大学卒業生ネットワークとも連携することで、次世代の地域社会の担い手を育む機会ともする。

1. 令和2年6月1日～令和3年3月31日：戸別訪問活動
 - 訪問延 217 世帯（実質 101 世帯。訪問先：茨城県南を中心に県央、鹿行地域への避難者。一部電話連絡による傾聴を含む。）
 - 戸別訪問実働人数：7名
2. 令和2年8月9日：美味しいコーヒーの淹れ方交流会
 - 内容：いばらきで活躍しているコーヒー店主からおいしいコーヒーの淹れ方を教わり、コーヒーを通して相互に交流を図ることを目的として開催
 - 場所：つくば市豊里交流センター調理室
 - 参加者：17名（避難者9名、支援者8名、うち子供4名）
 - 支援者参加者：NPO フェュージョン社会力創造パートナーズメンバー、ふうあいねっとメンバー



事業実施内容

3. 令和2年9月27日：ブドウ狩り交流会
 - 内容：「いばらきのおいしいを食べる」ことで茨城県の理解を深め、おいしい食を通して相互に交流を図ることを目的として開催
 - 場所：高須ぶどう園（行方市）
 - 参加者：37名（避難者30名、支援者7名、うち子供8名）
 - 支援者参加者：NPO フェュージョン社会力創造パートナーズメンバー、ふうあいねっとメンバー



4. 令和2年11月28日：世界一おいしいプリン作り交流会
 - 内容：いばらきで活躍しているお菓子料理家からおいしいプリンの作り方を教わり、プリンを通して相互に交流を図ることを目的として開催
 - 場所：つくば市豊里交流センター調理室
 - 参加者：13名（避難者7名、支援者6名、うち子供1名）
 - 支援者参加者：NPO フェュージョン社会力創造パートナーズメンバー、筑波大学学生支援団体 Tsukuba for 311 メンバー



5. 令和2年12月8日：自主避難者交流会

- 内容：自主避難者（被災時避難指示区域外）交流会
- 場所：つくば市役所コミュニティ棟
- 参加者：5名（避難者1名、支援者4名）
- 支援者参加者：NPO フェュージョン社会力創造パートナーズメンバー、ふうあいねっとメンバー



6. 令和3年3月4日：稲敷地区まち歩き交流会 in 大杉神社（第7回稲敷地区交流会）

- 内容：7回目の稲敷、美浦、阿見、牛久、土浦地区の交流会
- 場所：大杉神社（稲敷市）
- 参加者：14名（避難者10名、支援者4名）
- 支援者参加者：ふうあい県南メンバー、NPO フェュージョン社会力創造パートナーズメンバー、地域協力者



7. 令和3年3月6日：イチゴ狩り交流会 in 鉾田

- 内容：「いばらきのおいしいを食べる」ことで茨城県の理解を深め、おいしい食を通して相互に交流を図ることを目的として開催
- 場所：深作農園（鉾田市）
- 参加者：16名（避難者12名、支援者4名、うち子供5名）
- 支援者参加者：NPO フェュージョン社会力創造パートナーズメンバー



8. 令和3年3月14日：イチゴ狩り交流会 in つくば
(帰還者1名による協力)

●内容：「いばらきのおいしいを食べる」ことで茨城県の理解を深め、おいしい食を通して相互に交流を図ることを目的として開催。また、イチゴ狩り終了後、クラフト作り（イチゴの葉っぱの形をした箸置き）を行った。

●場所：つくばねファーム、大穂交流センター（つくば市）

●参加者：32名（避難者14名、帰還者2名、支援者16名、うち子供8名）

●支援者参加者：NPO フェュージョン社会力創造パートナーズメンバー



事業を実施しての感想（良かった点・反省すべき点）及び今後の課題等を記載。

本事業は避難者のパーソナルケアのための戸別訪問と茨城の魅力を知るための交流会の2つの活動を柱とした。多くの避難者は住民票は未だ福島県のみであるものの、このまま茨城で住み続ける意向を持っているため、今後の茨城での暮らしをより魅力的にできるように、茨城県内の名所を一緒に見て回ったり、美味しい食べ物を一緒に満喫することで、茨城県の良さを知ってもらい、その中でなるべく地域の人的資源に関わってもらえるような組立を行った。

1. 10年を節目とした大掛かりな訪問活動

今年度は10年節目ということもあり、茨城県南を中心に鹿行地域、県央地域にまで従来よりもエリアを広げて延 200 世帯を超える訪問活動（茨城県独自の緊急事態宣言時は電話による傾聴）を行った。その結果、これまでお会いできなかった方も含めて実質 101 世帯の方とやり取りをすることができた。当 NPO のお膝元であるつくば市やつくばみらい市、旧稲敷郡（阿見町、美浦村、牛久市、稲敷市）ではかなり木目細かに訪問をすることができ、さらなる繋がりを作ることができた。また、これまで訪問を全く行っていなかった鹿行地域（鹿嶋市、銚田市）、県央地域（石岡市、笠間市）の方を訪問することで、現況をお聞きするとともに、それらの方々が他の避難されている方や地域の方との繋がり具合も知ることができた。

鹿行地域では、これまでの当 NPO の交流会で緩やかな繋がりができ始めていたが、今年度の訪問により、交流会を開催したいと仰って下さる当事者の方が出てきたため、コロナが落ち着いてからとなってしまうが、一度当事者主体で集まりを持ちたいと思う。震災後10年を超えてしまったが、鹿行地域でのこの数年の継続した活動が、ようやく実を結びそうである。

県央地域では、震災直後から石岡市を中心とした支援団体「3.11 ふるさと会」が活動していたこともあり、限定的ではあるものの、横の繋がりはできており、会の継続的な信頼関係を基に困った時の相談対応もできていた。このようなセーフティネットの確認をできたことも、大きな意味があった。

2. 第二の故郷としての茨城県の魅力の伝承

ほとんどの方がこのまま茨城県で生活される意向を持っているため、各交流会では第二

事業達成度

	<p>の故郷となる茨城県での魅力的な食べ物、人、場所に触れられる機会を作ってきた。コロナ禍1回は止む無く中心となったものの、7回の交流会を開催し、合計134名（うち避難者83名、帰還者2名、支援者名49名）の参加があった。コロナによる外出控えのため、例年ほどの参加人数には達しなかったものの、参加者からは、茨城の魅力を知る機会、同郷の方と直接話をする良い機会となった、という回答に加えて、コロナ禍直接人に会えない辛さを払拭する良い機会となった、との回答もあった。上記活動写真からも工夫を凝らした、楽しい雰囲気伝わってくるかと思えます。</p> <p>3. 当事者主体の交流会の開催 今年度開催した交流会7回のうち、2回は当事者と帰還者の方が企画メンバーに入り、3回は当事者の親子が当日運営を行う形で開催した。このことで、なるべく当事者の視点を取り入れた会とできるように工夫を行った。</p> <p>4. コロナ禍での試行錯誤の活動 今年度はコロナ禍の活動であったため、感染防止に細心の注意を払いながら戸別訪問と交流会を行った。特に2021年1月中旬～2月末までは、茨城県独自の緊急事態宣言発令のため戸別訪問中止や交流会延期を余儀なくされた。そのため交流会は、2月末の宣言解除後、特に3月上旬に立て続けに行う事となってしまった。また、戸別訪問ではアポイントの段階で断られるケースも数件あった。そのため、11月からは一部を電話による傾聴に切り替えて活動を継続した。このように、今年度は試行錯誤の活動となってしまったが、外出して人に会うこともままならない時だからこそ、訪問や交流会を喜んでくださる方もいらっしゃったことが逆に大きな励みとなった。</p> <p>5. 筑波学院大学卒業生、筑波大学学生支援団体 Tsukuba for 311 との連携 今年度の活動には、一部新メンバーも加わったが、継続して地元で根付いた筑波学院大学卒業生や筑波大学学生支援団体 Tsukuba for 311 などの若い世代との連携を行うことができた。筑波学院大学卒業生は茨城県南にとっても強いため、茨城での社会課題に反応し、重要なセーフティネットとして信頼できる動きを見せてくれた。また、世代交代はあるものの学生支援団体として10年活動を継続している筑波大学学生支援団体 Tsukuba for 311 も、高いコミュニケーション能力とモチベーションを基に、避難者に寄り添った動きをしてくれた。アンケートを見ても、高齢者だけの集まりでは愚痴が多くなるが、若い世代が入るだけで雰囲気が変わり、場が明るく未来志向になる、という回答もあった。</p> <p>6. 他の支援団体との連携 福島県主催の毎月の定例会でふうあいねっと、福島県復興支援員、浪江町復興支援員、福島県からの派遣教諭、日本精神看護協会茨城支部などと情報交換をできたことで、茨城県全域や福島県・国の動きを客観視できたり、制度面での情報獲得ができた。当 NPO は、それを訪問活動や交流会を共有することで、避難者にも時には客観的な情報提供をすることに繋げることができた。</p>
<p>今後の目標</p>	<p>上記の「事業達成度」を踏まえ、団体としての今後の目標等を記載。</p> <p>震災から10年を超えるが、当事者にとっては通過点に過ぎないため、引き続き、以下の事に重点を置いて、寄り添った活動を関係組織や地域リーダーと連携しながら行っていくことで、セーフティネットに繋げていく。</p> <p>1. 避難者に寄り添ったパーソナルケアの継続 今年度重点的に行った訪問活動から把握できたニーズを基に、特に独居や高齢の方、課題を抱えられている方を中心に、継続して訪問活動を通して寄り添っていく。このことで、表面化しにくい避難者の声を丁寧に拾い上げ、各支援団体、地域リーダー、専門機関、福島県などに共有し、セーフティネットに繋げていく。引き続き、筑波学院大学卒業生や筑波大学学生支援団体 Tsukuba for 311 などの若手にも協力してもらおう。</p> <p>2. 避難されている当事者が主体となった交流会の開催 交流会開催に当たっては、継続して、避難者や帰還者に協力して頂くことで、当事者が主体となった活動を行っていく。特に企画、広報、当日運営の面で、連携を行う。</p> <p>3. 茨城の魅力を共有する交流会の実施 今後も、茨城の魅力を発信し、共有できるイベントとすべく、茨城県内の様々な社会資源と協働して交流会を開催する。開催場所も、引き続き、茨城県南、鹿行地域とし、避難されている方同士の繋がり作りに貢献していく。</p> <p>4. ふうあいねっと、福島県・福島県復興支援員、避難者自助グループ等との連携 これまで同様に、当 NPO の活動を他の団体に共有したり、他の団体の動きも見ながら効果的な活動にしていくために、ふうあいねっとや福島県・福島県復興支援員、避難者自助グループ等と連携をしていく。</p>

5. コロナ禍での活動

コロナ禍であっても訪問を喜んでくれたり、交流会を楽しみにしてくれていた方もいたため、感染防止に最大限の注意を払いながらも、できる範囲での活動を継続していく。